



加藤 元の



と暮らして
みませんか

20

熱射病は、見つけたときにすでに意識を失っているものもあり、取り返しのつかない場合も多い怖い病気です。体温が上がると高熱となるので、呼吸が速くなり体全体が熱く、元気がなくなり、ぐったりしてきます。

高温多湿の季節に、犬を車の中や日の当たる所に置いておいたり、暑いのに水をあげるのを忘れていたり、うっかり冷房を切ったまま外出したり、部屋を閉め切っていたり…といった、飼い主のミスで起きることが多い病気です。

熱射病では？とうたぐったたら、まず体温を測りましょう。高ければ、応急処置として、冷たい水で

熱射病

冷水で処置後、病院へ

体中をぬらすか、全身を冷たい水につけてから、冷水に浸したタオルなどで体を冷やしながら、ただちに救急救命設備とスタッフがいる病院へ直行してください。

熱射病になりやすい犬種としては、シーズー、パグ、フレンチブルドッグ、ペキニーズなどの短頭種やおでこの大きい犬、長毛種などが挙げられます。また心臓や肺、気管などの病気がある犬はかかりやすいので特に注意が必要です。種類とは関係なく、高齢犬、幼犬、長毛種などの犬などは梅雨時から夏場、さらに残暑の秋口にかけて熱射病になることが多く、注意が必要です。

短頭種の犬は生まれつき鼻孔が狭すぎる「鼻孔狭搾」と、のどの軟口蓋と呼ばれる部分が長すぎる「軟口蓋過長症」を持つものが多く、のどが狭いために、パンティング呼吸（激しい強い呼吸で体温を下げる）がうまくできず、特に熱射病にかかりやすいのです。

ですからこのような犬を飼っている人は、犬が元気なときにも病院で診てもらい、この病気が発見されたら早速矯正手術を受けておきましょう。手術は全身麻酔が必要ですが、正しい麻酔の知識と技術、手術後の完全看護が確実にできるスタッフと、設備のある病院であれば安心です。

（ダクタリ動物病院広尾病院院長、日本ヒューマン・アニマル・ボンド・ソサエティ会長）